

令和6年度 山県市総合教育会議（議事録）

1 日時

令和6年10月8日（月）（13：30～16：30）

2 場所

山県市役所3階 大会議室

3 出席者

市長 林 宏優

副市長 久保田 裕司

教育長 服部 和也

企画財政課長 丹羽 竜之

子育て支援課長 正治 裕樹

教育委員 大野 良輔

教育委員 千葉 純

教育委員 川田 八重子

教育委員 堀 恵子

事務局 学校教育課長 平工 雅之

生涯学習課長 大西 義彦

生涯学習課教育管理監 武藤 達也

生涯学習課課長補佐 安川 英明

学校教育課主幹 鬼頭 都

学校教育課課長補佐 奥村 竜也

4 第1部 山県市の教育について（13：30～14：45）

○山県市こどもサポートセンター 所長 大村 統子

○新教育ビジョンについて（案） 教育長 服部 和也

○質疑応答

5 第2部 教育行政の展開（15：00～16：30）

○講 話：京都芸術大学教授（元文部科学省官僚） 寺脇 研氏

○質疑応答

■ 会議の概要（別添のとおり）

（山県市こどもサポートセンターは以下「こサポ」という）

会議進行：学校教育課課長	
1 市長あいさつ	
市長	・この 30 年から 40 年の間、こどもたちに「生きる力」がどのように育まれてきたか、体力よりも、心の力が少し付いていない気がする。 ・出生率 1.20%、生まれた子は、毎年 4 万人減っている。 ・日本の DX は、韓国と比較すると、お金は 40 倍使っているのに、世界で 30 番台。しかし、韓国は 4 番目。学校は、ますますデジタル化していく。しかし、こどもたちが社会に入ったとき、現実はまだ大変な時代が来る。 ・心配になることはいくつもあるが、本市のこどもたちは、すくすく元気に育ってほしい。
2 第 1 部 山県市の「不応応・不登校」の対立 ○山県市こどもサポートセンター 所長 大村 統子	
大村氏	・本市、不登校の状況。令和 6 年 8 月末、年間 30 日以上欠席した児童生徒数は、29 人。内訳は、全欠席は 17 人、30 日以上欠席は 12 人。しかし、この状態が続くと、年度末には 48 人程度になると予想される。 ・こサポの役割は、家庭や学校と連携し、30 日以上休んでいる子が、休み休みでも学校に通い全欠席とならないようにサポートし、学校へ行かなくなっても、ずっと自宅にいるのではなく、こサポへ通うなど何らかの居場所を作ることだ。 ・令和 5 年度は、適応支援と保護者支援の充実から始めた。 ・こどもたちと話していると、「学校には行こうと思っている。」しかし、「誰にも会いたくない」と、心の内を開いてくれた子がいた。 ・こサポには、心のエネルギーを溜めることが必要な子が多い。 ・保護者支援について、相談が主である。電話や訪問などを通して親さんが何に困っているか、耳を傾け丁寧に対応している。 ・ペアレントトレーニングでは、お子さんとの良い関わり方を持つ講座を設けたり、不登校や発達障害をもつ親の会などを運営している。

大村氏	・こどもの状況に合わせて、学習支援や進路支援など厚みのある支援を今後は充実させていく。 ・相談件数について、令和5年度は84件、令和6年9月末時点は、260件。（内訳：176件は、学校からの相談。内容は、不登校や登校しぶりが多い。） ・令和6年度からは、山県高校生2人利用し、心の充電をしながら学習している。 ・保健福祉ふれあいセンター3階を改修し、「ここぷれ～CoCo-Place～」学習・相談・交流など様々なニーズに対応したスペースを作っている。場所の提供や時間の工夫に留まらず、個に応じてスタッフのスキルも充実させていく。こどもたちのために、今後も努力していきたい。
2 第1部 子どもの成長を応援する山県教育ビジョン 2025 ○教育長 服部 和也	
教育長	・教育ビジョンの改訂の時期を迎えた。2020 から 2025 へ。 ・ビジョンの考え方については、少子高齢化をメリットに捉えていく。それは、既に地域の方がいつでもサポートしてくれる環境があるからだ。 ・コンセプトは、みんなが成長を実感する教育だ。 ・従来、川の活動で教えてきたことは、命をとられる場所、危険なところであることを印象付けてきた。しかし、今は安全を確保しながら、川の魅力を体験する場所が変わってきた。 ・スクールワイドPBS（ポジティブ行動支援）については、本市の特色である。 ・こサポを保健ふれあいセンター内に作れたことは、最大のメリットだ。市長部局と一緒にあって、こどもたちを切れ目のない支援ができる。今後は、不登校以外のこどもとも交流を考えている。 ・しんどくなったらいつでも相談できる場所が2階にあり、勉強したい子は3階で自分のペースで学習できるスペースがある。先生方は、こどもたちを助けたいという温かい気持ちを持っているので、子供支援には良い場所となる。 ・ビジョン 2025 の概観は、生きる力＝生き方の軸をもつ（※私はいじめを絶対にしない！）ことを主軸にしながら、様々な経験をさせる。（人とつながる経験＝成長を実感する経験＝夢中になる経験＝失敗から学ぶ経験＝自分の正解をもつ経験）

教育長	・教育は、時代の流れに影響を受けることもある。しかし、今後は、コペルニクス的転回（※発想を根本的に変えることによって、新しい局面を切り開く）により、改革していく。コロナにより縮小傾向だったが、実体験やアウトプットを増やし、拡大していく。 ・これからの義務教育は、選ばれる学校を目指さないといけない。 ・教育委員会が、教育サービスをやっていく時代に入った。 ・新たなこどもサポートとして、データ連携を活用することでこどもたちを早く助けたい。 ・主要施策のデザインでは、こサポが中心となり、やまがた実体験学習やアントレ教育（※失敗から学ぶ）など様々な経験をさせることによってこどもたちを成長させていく。 ・ビジョン 2025 では、言葉を換えていく。一斉一律から個別最適化へ個に対応していかななくてはならない。 ・学校ハイブリット化により、15:30 以降は新たな学びの仕組みを取り入れていく。例えば学校内で地域の方がこどもたちを教えるような講座を考えている。 ・全国学力テストを分析すると、学力の低い 10%の子は、これまで通りきめ細かな指導をしていく。その効果は、立証されている。今後、高い 10%の子を如何に伸ばすかだ。 ・これからの合同学習は、大きな学校から小さな学校へ行っても面白い。 ・鹿児島県日置市を参考にすると、これからの学校は、地域の方がどんどん入り、新しい発想を入れてくれたほうが面白い学校（※目指すのは、地域の学校）になる。
3 質疑応答・感想など	
副市長	・こサポの施設について、今後のこどもの拠点になると良い。 ・（服部教育長の市内児童・生徒の学力テストについて）学力が低い層を育てていくことは大切であるが、学力の上位層をさらに育てる教育も大切である。 ・読書と運動は大事である。それに取り組む雰囲気作りも重要である。 ・自身は少子化対策より高齢化対策の方が大事だと思う。高齢者を上手に活用する方法を模索し、こどもの教育に繋げる考え方が大切である。 ・楽しい授業が大切である。学校を楽しい場にするという努力は、不登校等の問題改善に繋がる。

副市長	・何事にもチャレンジ精神が大切である。
子育て支援課長	・子育て支援課長として、こどもの心のケア及び身体のケアを行っていくことが大切である。こどもが戸惑わないように教育と行政が協力して事業を行っていくことが大切である。
教育委員堀	・こどもだけでなく、地域・人・学校作りを行うことが大切である。 ・私は葛原に住んでいるが、高齢者は病気になって市外等へ出て行く。また、高齢者は移動が困難であることから公共バス等の対策を行って欲しい。 ・葛原に廃校があるが、廃校を活用した椎茸作りを行ってみたらどうだろうか。
教育委員川田	・げんきハウス、げんき広場等で元気にこどもが遊んでおり、色々な友達と勉強していることも聞く。友達と切磋琢磨して生きる力を育んで欲しい。
教育委員千葉	・教育は、ソフト面とハード面の両方をうまく兼ね合わせることによって、より良いものになっていく。ぜひ、山県市で教育を受けたいような仕組みを作って欲しい。
4 第2部 教育行政の展開（15：00～16：30） ○講 話：京都芸術大学教授（元文部科学省官僚） 寺脇 研氏	
寺脇氏	・2022年に山県学園構想の取り組みを知り、実際合同学習の様子を見学させていただいたことがご縁だ。 ・教育行政の仕事がしたくて、1975年文部科学省に入省し、同期のキャリア官僚は10人。 ・東京でも地方でも同じ教育を受けることができる。それが私の使命だと頑張ってきた。 ・若い頃は、こどもたちに質の高い学びを提供してきた。明治5年に今の学校の原点「学制」が始まり、昭和62年に初めて「生涯学習」という言葉がでてきた。誰も聞いたことがない言葉で、法律を整備し審議していくことは、凄く大変だった。 ・最も尊敬する大先輩は、剣木 亨弘（けんのき としひろ）だ。文部省の官僚から参議院議員、そして、文部大臣になられた。しかし、生まれは福岡県大任町（おおとうまち）で大変田舎で育った。 ・学校は教育する場（こどもたちは教育を受ける）から学習する場（意欲的に学ぶ）に転換していく。※コペルニクスの転回だ！

寺脇氏	・東京大学時代、成長の限界というヨーロッパで報告された本を読んだ。凄く衝撃的でした。人類は果てしなく成長していけると思っていたのに、本の中では、人口増加や経済成長がこのまま続けば、地球上の成長が限界に達すると警告していた。（例：石油、石炭など資源は掘り尽くすと限りがある。）本のメッセージは、限りある物を皆で競争するのではなく、心を豊かにしましょう！と感じた。 ・1984年に福岡県に出向した。政令指定都市（北九州市など）以外を担当していた頃、学校が荒れていた。中学校のガラスが割れ、先生が殴られていた。全国でも荒れていたと思うが、なぜストレスが溜まっていたのか、その頃は分からなかった。しかし、振り返ると、一斉一律や同調圧力があるから学生は行き場がなく荒れた。（例：学校では丸坊主、制服） ・当時の教育の未来予想は、少子高齢化や国際化、情報化や科学技術の高度化でした。 ・時代は移り、地方創生や学校の統廃合が聞こえてくるが、人を奪い合ったり、こどもを犠牲にしてはいけない。柔軟に動くこと。そして、地域が学校を盛りあげ、まちを良くすることが大切だと感じる。
3 質疑応答・感想など	
副市長	・「教育」を「共育」に、「teacher」を「educator」とするような、教師が一方的に教える勉強とは違う学習の機会を積極的に設けていくべきである。
教育委員 大野	・近年、自治会やPTAといった大人同士の横のつながりが希薄になっており、こどもにも影響が出ていると感じる。 ・地域で人と人とのつながりを大切にしていけるべきである。

（16：30 閉会）